

審査所感

【漢字作品】有岡 郊 崖（ありおか しゅんがい）

日展特別会員 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

「日本の書展」東京展に公募臨書の部が設けられてから今回で15回を迎えました。順調に内容の充実とともに出品数を伸ばしてきましたが、残念ながら今回は若干の減となりました。しかしながら1,000点近い作品群には一人一人が、臨書を通じて造形美や用筆法の習得など真摯に学書に向き合う姿が表出した見応えあるものばかりで、書の未来に期待と光明を感じさせられました。

私達はなぜ臨書を学書の基本に据えているのか、また先人名家達も日々臨書を怠ることなく習練に努め、そこで得られた造形や技法をもとに自らの書風確立を希求してきたのか。それらを考えれば臨書がいかに学書において欠くことの出来ない所作であることが分かるでしょう。

更に踏み込んで臨書態度についてみると方法論としていくつかが見えてきます。

その一つは自身の書の長所を更に高める為に臨書の対象とする古典を選択して臨書を重ねる方法。もう一方自身の短所を修正する目的で古典を選択して臨書する方法などがあります。

またそれぞれ古典の持つ造形、用筆、リズム感など様々な特徴のいずれかを抽出して自身の感性に則した主観的な臨書態度、反面あくまで忠実に臨書の対象物と対峙して、徹頭徹尾形線の具現化に努める臨書方法など様々なやり方があります。

いずれにしても臨書から得られるものは無限と言えます。是非これからも古典を師と仰ぎ臨書を重ねていってほしいものです。

【かな作品】土橋 靖子（つちはし やすこ）

日展理事 全国書美術振興会常務理事 「日本の書展」現代書壇巨匠

中国から伝わった漢字をもとに、私たちは我が国の風土の中で熟成された仮名を生み出しました。特に平安後期から鎌倉時代にかけて、仮名の美の究極とされる揺るぎない美を誇る名筆が数々生まれ、私たちはそれを古筆として学び、現代に生きる作品の礎としています。

さて今年も多く応募作品が集まりました。古筆によっては、一見平明に見えるものもある一方、院政期の古筆に多く見られる連綿や行の絡みによる動的、個性的なものもあります。

前者はとかく初心者向きと思われがちですが、実は中庸の美を表現するのはなかなか難しいものです。しかし今回それを見事に掴んだ秀作が数点見られたのは、誠にうれしいことでした。

また、一枚を書きあげるのに大変な時間をかけたと思われる労作も見かけられ、入落を超えて、その誠実さに敬意を表するものも数々ありました。

いずれにせよ、仮名の美を包括的に受け止め、ただ形を真似るだけの臨書ではなく、その美しさや魅力を感じる心を大切に、それを再表現する姿勢で筆をもち続けることが、上達はおろか、臨書行為そのものがご自身の血肉となっていくことを確信しています。

どうぞこれらを参考に、「継続は力」、是非今後も果敢に挑戦され、次回に向けてより良い作品を出品していただくことを祈念しております。

【篆刻作品】和中 簡 堂（わなか かんだう）

日展特別会員 全国書美術振興会理事 「日本の書展」現代書壇代表

摹刻という地味な作業には、先人達の知恵が凝縮された世界を垣間見たり、その手法の見事さに驚いたり感心したりと、様々な感動を与えてくれます。

こんな作品を刻ってみたいという制作への願望や原動力になったりと、篆刻の基本を知らないうちに身に付けていたり、初心者のみならずベテランの制作者においても欠かすことの出来ない学習の一端であると言えます。

余り難しい事を言うと敬遠されてしまいますが、先人達の作品に目を向けると常に発見があります。

古璽・漢印に総称される古銅印、明代以降の名人の刻印を見るにつけ、作者の崇高な理念や精神性までも窺うことができます。上辺だけではなく、摹刻を重ねるうちその作者の人間性にも触れることが出来ます。

今回の落選作品の中には側款の摹刻を付したものでありましたが、実拓ではなく、アクリル画材を使用したらしい版画のようなものであり驚きました。

やはり正統な手法を用いて、この素晴らしい篆刻の文化に親しんでいただきたいと願っています。